報告

溝の口　亀屋
探索記―国木田独歩

神野幸人
（会員　鎌倉市台）

忘れえぬ人々（明治三十一年四月）

『多摩川の二子の渡をわたって少しばかり行くと溝口という宿場がある。其中程に亀屋といふ旅人宿がある。恰度三月の初めの頃であった。』ではじまる『忘れえぬ人々』の街道筋を探索した。

大山道は矢倉沢往還ともいい、江戸城の赤坂御門から青山・三軒茶屋・二子・溝口・荏田・厚木・伊勢原を通り、箱根の矢倉沢・足柄峠を越え、甲府や沼津方面へ別れていき、江戸時代、それまでの古い道をつないで作られ、丹沢の大山の阿夫利神社にお参りする人たちが通るので、大山道といわれた。

旧亀屋旅館玄関

多摩川は現在、洪水よけの高い土手で多摩沿線道路として一劃されているので、渡し場は偲ぶべきもないが、二子神社の所、四つ角の〃喜よし〃というそば屋に「旧大山街道二子の渡し入口」の木碑がある。

そこから約一・五㌔の溝口神社までには大貫大庄屋（岡本かの子の生家）・タナカヤ呉服店・灰吹薬屋・と大店が点在し、亀屋は溝口神社のすぐそばにある。

現在は亀屋会館として、料亭・結婚式場を経営しているが、相当な敷地である。明治時代の旅館も、さぞ立派であったろう。

亀屋会館

この宿の旅人、大津辨二郎が「忘れ得ぬ人」とて、〃瀬戸内海小島の磯の漁り人〃〃阿蘇の壮漢〃〃四国三津ヶ浜の琵琶僧〃を詳記している。そして、〃番匠川の瘤ある舟子〃、その他はもう止そう、餘り更けるから、とて詳記してないのは残念である。

〃舟子〃とは何を言ったのだろう。〃番匠川の項に「城下」に用ある者、皆小船に乗じて海よりこの川を泝り来たる……終日ここに小船群がり集い、色黒き舟子……〃とあるが、自家用小舟の事か。さすれば瘤ある舟子を探すは困難か。

昭和九年六月二十三日(独歩命日)、島崎藤村が題字を書いた、国木田独歩文学碑除幕記念が行われ、独歩の未亡人・令息・令孫が招待された写真が大切に保存されている。たった一晩の宿客の一文を、大切に礼を尽くす溝口宿場の亀屋さん、立派である。「忘れ得ぬ人々」の名作と共に、忘れえぬ店となるであろう。

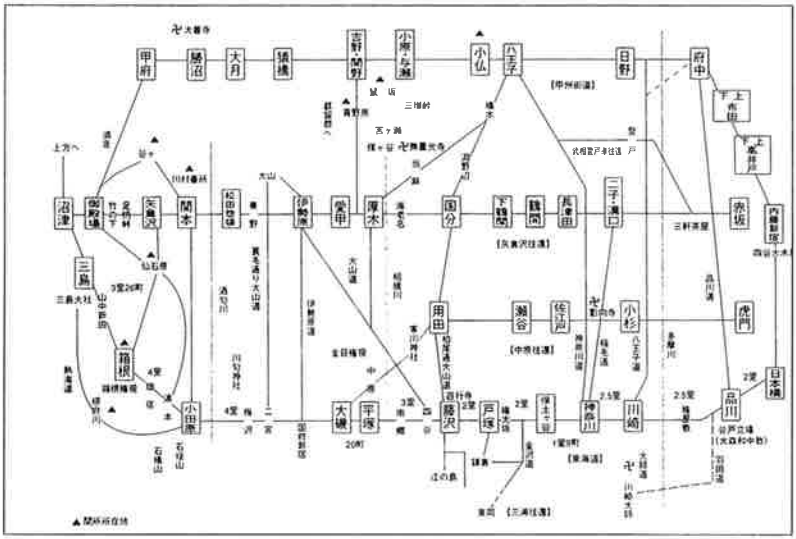
国木田独歩文学碑
(題字は島崎藤村)

大山道は矢倉沢往還というので、溝口神社・二子神社の間を往復した。

二子神社では、岡本太郎作、岡本かの子文学碑「誇り」に、かの子と一平の愛の記念碑に感動し、その昔、だんご・甘酒の小旗が川風に揺らぐ葦簾ばりの茶屋があったであろう、二子の渡しの木碑のあるそば屋で、早めの昼飯、揚げなす。冷しそばを食し、炎天三十分、汗した体を龜屋のシャーベットで冷やして、三時間の探索を終えたが、二十年前の湘南、国木田独歩記・春の武蔵野記と違って、ご子孫が現存している点、得も言えぬ余韻が残った。

佐伯に帰ったら、坂本邸を訪れよう。独歩は勿論だが、新聞配達した子供のころ、夏蜜柑泥棒した小生に「坊、夏蜜柑もっていっていいよ」を言ってくれた。忘れ得ぬ老人にお礼を述べるためにも。

〔平成十三年七月二十日(金)(快晴)〕



近世神奈川の主要道と矢倉沢往還